

2016年度

川崎市姉妹友好都市との教育交流

クロアチア共和国 リエカ市

12月3日～12月8日



特別支援教育センター訪問（裁縫室にて）



マルコ・フィリポヴィッチ リエカ副市長(左)訪問（右は 高木 朗 団長）

川崎市姉妹友好都市国際教育交流事業実行委員会

リエカ市訪問日程

12月3日(土)

- 10時35分 成田空港発
- 15時10分 フランクフルト着
- 18時10分 フランクフルト発
- 19時25分 ザグレブ着
- 21時50分 リエカ着



モシュチェニチュカ・ドラガ

12月4日(日)

- 10時00分 リエカ市郊外(オパティヤ)視察
- 16時00分 リエカ市内視察

12月5日(月)

- 9時30分 特別支援センター訪問
- 11時30分 イタリア・サン・ニコロ小学校訪問
- 14時30分 リエカ市副市長表敬訪問
- 16時00分 ガイドによるリエカ市の歴史解説

12月6日(火)

- 9時30分 ニコラ・テスラ小学校訪問
- 16時00分 リエカ市内史跡見学
- 18時00分 リエカ市郊外(カスタヴ)視察

12月7日(水)

- 9時00分 リエカ発
- 10時30分 ザグレブ着
- 14時40分 ザグレブ発
- 16時10分 フランクフルト着
- 17時50分 フランクフルト発



高台にあるトルサット城

12月8日(木)

- 13時05分 羽田空港着

1. リエカ市について

川崎市とリエカ市の関係は古く、2017年で姉妹都市提携から40周年を迎えることとなりました。他の姉妹友好都市に先駆けて、1977年6月23日に姉妹都市提携盟約書に署名がなされ、両市は固い絆で結ばれました。以降、文化・教育交流を始め、産業・経済といったあらゆる面において交流が継続されてきました。

リエカ市はクロアチアのみならず中央ヨーロッパ最大の港湾都市です。アドリア海に面した風光明媚な保養地として知られ、また、石油化学、造船、製糸業が発達した工業都市であると同時に、文化都市でもあります。



山が迫ったリエカの地形と平野に位置している川崎の地形とは似ても似つきませんが、港湾都市、工業都市というところ、立派なサッカー場がありサッカー熱が高いところなどは、川崎と似ています。

リエカ市はクロアチアの北西部、クヴァルネル地方に属し、その中心都市です。「リエカ」とはクロアチア語で「川」を意味し、市街地の地面の下には多くの川が流れているとのこと。また、漁場としても豊かであり、アドリア海の中でもクロアチア側が海流の関係で魚が豊富に捕れるそうです。リエカ市には豊かな文化遺産が数多く存在しており、多文化の都市としての独自性があります。市内には、アルバニア人、ボスニア人、モンテネグロ人、チェコ人、ハンガリー人、マケドニア人、ロマ人、スロヴァキア人、スロベニア人、セルビア人、イタリア人などの少数民族が多く居住しており、それぞれの国の芸術、音楽、舞踊等を通じて、リエカ市の文化や社会に多様性を与えています。また、毎年2～3月に行われる「リエカ・カーニバル」と呼ばれる仮装行列は、クロアチア最大であり世界第3位のカーニバルで、海外からの観光客が押し寄せるほどの賑わいを見せるそうです。



1988年に川崎から贈られた「友情」の像



1980年に川崎から贈られた石灯籠

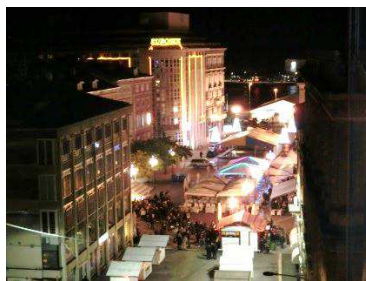
リエカ市の人口は約13万人で、行政区で言うと、プリモリエ=ゴルスキ・コタル郡に属します。ザグレブ、スプリトに続く、クロアチア第3の都市です。市政方針として、市民の国際性を背景に、「寛容」、「相互理解」、「共生」に価値を置き、多国籍・多文化社会の開かれた都市としての地位を切り拓いてきた歴史があります。

交通網に関しては発達が遅れており、電車の時刻表はあつてないようなものだそうで、バスの時刻も15分の遅れは遅れに入らないと言われるほどルーズだそうです。しかし、ハイウェイが整備されたことにより、首都ザグレブからリエカまで1時間半ほどあれば着いてしまうほど便利になったそうです。ハイウェイが整備される前は、4~5時間もザグレブ空港からかかったということなので相当便利になったと言えます。

とはいえ、今回の訪問においては、川崎を出たのが午前6時で、リエカに着いたのが午後10時（日本時間で次の日の午前6時。時差は8時間。）ということで、待ち時間を含め、24時間ほどかかり、決して近い距離とは言えません。



整備されたハイウェイ



週末の賑わい



コルゾ通りはクリスマス一色

ザグレブの空港に降り立つと、風は冷たく、そこに表示されていた温度計は0度でした。一方、リエカでは日中は10度程度、夜も3度位が12月の平均気温のようで、ほぼ日本の気候と変わらないように感じました。リエカ市は、北緯45度に位置し、日本で言うと稚内市と同じ緯度になります。しかし、地中海気候のため、日本とさほど変わらない印象を受けました。むしろ、内陸に位置する首都ザグレブやザグレブからリエカに向かう山間の土地のほうが、氷点下まで気温が下がるため、リエカで過ごした数日はさほど寒いとは感じませんでした。しかし、地元の人に言わせると、訪問した期間はブーラと呼ばれる北風が吹いていなかったから良かっただけで、ブーラが吹いたら洗濯物が飛び、家の外に出るのが大変なほど冷たい強風が吹くときがあるそうです。



朝市の様子



コルゾ通りを往復する「機関車」(無料)



ブーラの神様



聖ヴィド大聖堂



街のシンボル時計塔



ローマのアーチ

リエカの市街地に着くと、土曜の夜だったため、メインストリートのコルゾ通りでは、深夜にもかかわらず 300 人を超える若者で溢れていました。お祭りか何かかと思っ
て見に行くと、街角のバーに人が集まり、路上で音楽を大音量で鳴らし、酒を酌み交わしているだけで、それが明け方まで続いたのでした。

そのコルゾ通りを中心に、リエカの街は、石で作られた建物が連なり、歴史を感じる街並みでした。しかし、リエカは三度街が破壊された歴史があり、1 回目は 1750 年に起きた大地震、2 回目は第二次世界大戦の空襲、3 回目は社会主義者によって、歴史的な建造物がほとんど破壊されてしまったそうです。その結果、古い建物と新しいものが混在しており、古い建物に合わせて新しい建物を建てて調和させているそうです。その一方、市街地を歩くと、ローマ時代の古い遺跡が点在し、歴史ある街だという印象を持ちます。

かつて、ローマ帝国、ヴェネツィア共和国、オーストリア帝国など、様々な民族や国の支配下におかれ、第一次世界大戦後は同じリエカ市の中でも、イタリアとユーゴスラビアに支配される時代がありました。1947 年からはユーゴスラビア領となり、チトー大統領の下、独自の社会主義体制が敷かれます。1991 年、ユーゴスラビア紛争が勃発し、リエカはクロアチア共和国の都市となりました。

街中を案内して下さったガイドさんの祖父はオーストリア出身、もう一人の祖父はイタリア出身、本人はユーゴスラビア出身で、子どもはクロアチア出身、しかし、全員リエカ市出身だと言っていました。様々な国や民族が入り混じる、クロアチアの複雑な歴史的背景を感じさせられる街でした。



ローマ時代の遺跡が残る考古学パーク

2. クロアチアの教育制度について

クロアチアの教育行政機関は、日本の文部科学省にあたる科学・教育・スポーツ省があります。一方、教育委員会のような組織はなく、学校は科学・教育・スポーツ省の直轄管理下にあります。クロアチアの教育制度は、就学前教育（1歳～6歳）、初等教育8年（7歳～14歳。この8年間は義務教育期間。）、中等教育4年（ギムナジウム（高校）と各種専門学校などに分かれています）大学等高等教育3年以上で構成されています。



リエカから車で30分ほどで行けるクロアチア屈指のリゾート地オパティヤの風景

初等教育の授業はクロアチア語で行われており、カリキュラムは、1年から4年までに、「クロアチア語」、「数学」、「自然と社会」、「音楽」、「美術」、「英語」、「体育」、「宗教（選択）」を学び、5年になると、この「自然と社会」が「自然」に代わり、7年生になるとさらに「自然」が「生物」に代わり、5年から8年までは、地理、歴史、技術が加わります。さらに、7・8年生では、化学と物理が加わるというのが一般的です。また、第2外国語の授業を実施している学校も多く、イタリア語やドイツ語を学べる機会にも恵まれているそうです。2学期制を敷いており、1学期は9月6日～12月23日まで、2学期は1月10日～6月15日までとなっており、夏休み期間が2か月以上あります。その年の4月1日までに満6歳になる児童は、同年の9月に入学することになります。



オパティヤからさらに車で30分ほど海岸線を北上したモシュチェニチュカ・ドラガ

中等教育は、ギムナジウムと呼ばれる4年制の高校（普通科または語学、古典、自然科学・数学、自然科学等の専門科）と、1～5年制の専門学校（技術、工業、手工業等）の他

に芸術学校（音楽、舞踊、絵画等）に分かれています。中等教育を終了後、希望者は高等教育を受けることができます。4年間の中等教育を受ける生徒は、最終学年の最後に行われる全国共通試験を受験します。この試験結果によって希望の大学に入れるかどうかが決まります。高校は3年で卒業可能ですが、大学へ進学する資格を得るためには、4年間高校に通う必要があります。3年で卒業した場合は、試験を受けて大学進学の資格を得ることも可能です。高校から大学への進学率は78%となっています。



モシュチェニチュカ・ドラガからさらに10分。教会を中心とした小さな街モシュチェニチュ

3. 学校訪問報告

今回、訪問した学校は3校でした。特別支援教育センター、少数民族学校、市街地の中にある小学校の3校です。どの学校からも熱烈的な歓迎を受け、学校の様子を丁寧に説明してくださり、有意義な交流ができました。

(1) 特別支援教育センター

まず、1校目は、市街地からほど近い特別支援教育センターを見学させていただきました。この施設は、リエカ市ではなく、プリモリエ＝ゴルスキ・コタル郡が経営し、子どもたちを療育している場所です。大きくは知的障害とそれ以外の障害に分けており、一人ひとりの障害に応じた療育をしています。この本校の他に3つの分校があります。この学校には、この郡の各地域から子どもたちが通っており、現在、151人が在籍しています。

到着するとすぐに校長先生を始め、6名の先生から施設や教育課程について説明を受けました。その後、製本や裁縫ができる作業場など、校内を見学させていただきました。



センターの外観



トレーニングルーム



プレイルーム

① プログラムについて（リハビリテーション担当）

この施設では、義務教育 8 年のプログラムが組まれています。軽度、中度、重度の 3 つのグループに分けられ、21 歳まで対応したプログラムになっています。このプログラムの内容は単純なものなので、障害の程度に応じて時間を掛けてゆっくり取り組めるようにしているのです。毎日の生活に必要な技能の習得はもちろんのこと、音楽療法や感覚統合の訓練、運動機能の維持・改善のための理学療法などを実施しています。特に、コミュニケーションの機会を大切にしており、近くの幼稚園の子が来校したり、他の学校との交流会を実施したりしています。地域の行事にも参加し、クロアチア最大規模の国際カーニバルであると同時に、クロアチアの文化遺産でもある「リエカ・カーニバル」のときには、自分たちで作った衣装を着て仮装行列に参加しました。また、課外授業も数多く実施しており、ドイツの学校に協力してもらい美術の授業を実施しました。他にも、土曜日に柔道の試合をしたり、サッカーや水球のチームと一緒に身体を動かしたり、自分を防御するためのプログラムもあります。国（日本の文部科学省にあたる科学・教育・スポーツ省。教育委員会にあたる組織はない。）が提供する犬セラピーのプログラムも人気で 5 匹の犬がいます。先日は人形劇鑑賞のために劇場に行ったり、自然科学博物館へ社会見学に行ったりもしました。こうした校外学習には警察が付き添いの協力してくれます。



アロマの香りがするリラックスルーム 製本工房でつくられていたのはこの郡の学校の名簿

② 職業訓練について（心理学担当）

卒業までの 3 年間のプログラムで、軽度の障害がある子を対象としています。学校を出てから独立して生活をしていくための初歩的な訓練です。製本業、木工業、農業、繊維産業、観光産業などで働くことができるようなプログラムがあります。作業場は 2 つあり、製本工房と裁縫室があります。他に校内には園芸場があり、校外ではホテルやお菓子屋さ



裁縫室では、将来、仕立屋になるための実践授業が行われていた。

人などで訓練の場を提供してもらっています。3年間で独立の準備をし、その後、その業界で働くことができるようにプログラムが組まれています。

現在では、多くの卒業生が社会に出て活躍しており、パティシエや家具職人として有名になっている者もいます。リオパラリンピックの男子走り幅跳び（知的障害）で銀メダルに輝いたゾラン・タリッチ（Zoran Talic）選手もこの施設の出身者であり、子どもたちに目的を持って課題に取り組むことの大切さを教えてくれています。



ゾラン・タリッチ選手



学校で開発した装置の数々

③ 生活訓練について（プログラム開発担当）

本校では、重度の障害がある子へのプログラムを独自で作成しており、2012年には国からの認定を受けています。知的・運動的に刺激を与えるもので、易しいプログラムでありながら、最も人間的なプログラムです。目的は自立を目指すということです。食事や掃除など自分で生活ができるようにするプログラムです。友達の大切さや出かけることの楽しみといったことを学び、周辺の社会に溶け込めるようにします。しかし、それ以上の重度の子になりますと、いくら子どもたちが天使だと言ったって、テーブルやトイレを汚したあとの面倒は大変なことです。それを少しでも軽減ができるようなグッズを工業大学と連携して開発しています。その子の障害に合わせて、“YES”、“NO”や、現在したいことを表現できる装置を作りました。

④ 学校の理念について（心理士）

この学校を運営していくためには、多くの方の協力が必要だと考えます。その象徴としてあるのが、玄関を入ったところにある「樹」の作品です。子どもたちを一枚一枚の葉っぱとして表現し、それぞれの障害は違うけれど、一つの幹に繋がっているということを表



先生方のプレゼンテーションや懇談の様子



学校の理念を表した作品「樹」

しています。みんなが集まって協力して、この場所で50年以上、私たちはこの学校を経営してきました。それは教員のモチベーションについても言えることです。教師一人ひとり、異なる個性で、仕事自体も分業体制になっていることが多いです。しかし、共通していることは、自分の仕事に誇りを感じ、生き甲斐を感じているということです。この学校を卒業したのちに成功した報せを聞き、子どもたちに伝えることができたときは、特にこの仕事に携わっていることを光栄に思います。この学校を取り巻く様々な課題に真正面からぶつかって解決してきたことが、今日の学校が存在できている証拠であり、職員が誇りを持って働くことができている理由です。

⑤ 子どもの人権について（ソーシャルワーカー）

私は、特に、子どもの人権を守るための仕事をしています。子どもたちを取り巻く社会の中での人権について勉強し、実際の場面で対応しています。障害のある子が社会に出ていくことは重要なことですが、それには周囲の協力が不可欠です。誰もが社会に関わることができる町づくりをこの地域から広めていきたいと考えています。そのためには、子どもの教育や訓練はもちろん大事ですが、両親の訓練、大人の教育も大切だと感じています。

⑥ 学校職員・施設について（校長先生）

この学校の職員は全員で82人です。その中でも、教員は62人です。そのうち、45人がリハビリテーションに関わる仕事をしています。具体的にはソーシャルワーカー、心理士、作業療法士、理学療法士、感覚統合に携わる仕事をする人など、専門性が高い仕事をしています。将来的には、ここの機能を拡張して、家族を支援していくことも視野に入れた支援センターにしたいと考えています。



美術室では、技術と美術を一緒にしたようなリサイクル製品を制作する授業が行われていた。

(2) イタリア・サン・ニコロ小学校

2校目は、市街地から10分くらい車で走ったところにある、海沿いの高台にある造船所を見下ろす場所にありました。イタリアの少数民族のためにつくられた学校です。訪問した次の日（12月6日）が聖ニコラ（サンタクロースの起源と言われる聖者。校名の由来となっている。）の祭日でお祭りがあるため、子どもたちも教員もその準備に追われていました。その忙しい中、お邪魔をさせていただいたのですが、訪問したことに感謝され、大い

なる歓迎を受けました。劇のリハーサルの様子や飾り付けの準備の様子を見学させていただきました。校内の装飾はどれもセンスのあるものばかりで、子どもの作品とは思えない完成度の高いものばかりでした。参観をさせていただいたクラスでは、「リエカ・イタリア版 共生共育プログラム」とも言える、より良いコミュニケーションを学ぶための活動を実践していました。これは「市民教育」と呼ばれる授業で、この日は、話さずにコミュニケーションをするという活動で、4人1組になってお互いの目を見ながら自分が欲しいブロックを集めるというゲームを行っていました。こうしたゲームを実施することで、よく見る力、相手を尊重する力が身についていくとの説明を受けました。



「市民教育」と呼ばれる授業



授業の最後に指で「樹」の絵を制作

① 少数民族学校について（校長先生）

リエカ市にはイタリアの学校が4校あり、本校はそのうちの1校になります。基本的なカリキュラムはクロアチアの学校と一緒に、7歳から14歳の子が通う8年生の義務教育学校です。違うところは言葉がイタリア語だということだけです。生徒数は191人、教師は40人という小さな学校であり、家庭的で絆が強いということが言えます。先生が親で生徒が子どもといった感じの家族のような学校です。

② 学校の特徴について（生徒によるプレゼンテーション）

この学校は、すべての生徒の価値を大切にしている学校です。この学校は、イタリアの少数民族のためにつくられた学校のため、1年生から4年生までクロアチア語の授業があります。他にも課外授業として、情報処理、ジャーナリズム、水泳、イタリア語、ガーデンづくり、人形劇鑑賞などがあります。12月1日には「算数の夜」というプログラムを実施したばかりで、夕方から家族で学校に集まり、親子で算数のゲームをしながら学ぶという



生徒による学校紹介



校長先生との懇談



おみやげの折り紙を渡した。

活動をしました。また、環境学に取り組んでいることも特徴的だと思います。クロアチアには全国的に取り組んでいる「緑の清掃の日」という行事があるのですが、この日には、先生も生徒も一緒に地域の方とともに清掃活動をしています。

放課後の「アフタースクールワークショップ」と呼んでいるクラブ活動も特徴的だと思います。イタリアの方言を学ぶ講座などが人気です。また、1月に行われる「リエカ・カーニバル」のときは、イタリアの少数民族の衣装を着て参加しているのですが、とても評判が良いです。

他にも、毎週土曜日に行われている「リアド (Liado)」と呼ばれる、芸術的な才能がある生徒の技能を伸ばす授業も特徴的です。この授業は、本校だけではなく、他校からも簡単な試験を受けて参加する子がいるほどの人気があるプログラムです。クロアチアには、美術・文学・音楽の全国的なコンテストがあります。この郡のコンテストは本校で行います。全国 800 校が参加しており、スカイプ (Skype・無料ビデオ通話) でコンテストを実施しています。

③ 市民教育について (市民教育担当・生物学教師)

「市民教育」という言葉は、様々な国や地域で使われますが、いつも同じ内容を意味するものではありません。このシチズンシップを育成するための学科は、クロアチアの中ではリエカ市だけが実践しているプログラムです。そのリエカ市の中でも 24 校中 6 校でしか実践されていない実験的な活動です。さらに、6 校の中でも 2 言語で実施しているのは本校だけです。この授業は選択科目のひとつで必修ではありません。普段は金曜日の 6 時間目に行っています。5 年生を対象に取り組んでおり、21 人中 10 人が参加しています。全ての学校、全ての学年で実践できていないのは予算の都合です。もっと多くの生徒が参加すべきプログラムだと思っています。

このプログラムは、様々なゲームを通して科学的・社会的なことを考えられるように構成されています。周囲の人を尊敬し、自らの行動に責任が持てる大人になることを目指したプログラムで、宿題も評価も無い授業です。学校内の問題だけではなく、家族や周囲の人たちとの関係の中で、これから自分たちが直面する課題について、どのように判断すべきか問われる場面において役に立つ内容だと考えています。流動的な社会情勢の中で、時代が変化したり逆戻りしたりすることも考えられます。私たちが実践している「市民教育」



お祭りの準備で慌ただしい校内



学校の外観



学校から見えるのは立ち並ぶ工場

の考え方の根底には、経済発展ばかりではなく、社会性・人間性を大切に残していかななくてはならないという思いがあります。このプログラムの成果はまだ先のことですが、今後、この授業を受けた生徒と受けていない生徒にどのような影響が出てくるのかということには関心があります。教師にとっても、子ども時代に学ばせるべきことは何かということを考えさせられるプログラムです。

(3) ニコラ・特斯拉小学校

3校目は、市庁舎から徒歩5分くらいの場所にある街中の小学校でした。もともと同じ校舎内にリエカ大学の学部があったため、多くの学生が授業の補助に来ていたそうです。校長先生と心理士の先生が対応してくださり、学校の様子だけではなく、クロアチアの教育行政や教員養成プログラムの在り方についても説明をしていただきました。見学をさせていただいたクラスでは、少人数指導を実施しており、28人のクラスを2つに分けて授業をしていました。15人のクラスでは、担任と視覚障害のある生徒のための補助役と大学生が指導に当たり、13人のクラスでは、少人数指導の教師と多動な生徒への補助役の2人が指導に当たっていました。つまり、28人の生徒を5人の大人がみているということになります。

① 学校の概要について (校長先生)

この学校は1年生から8年生が通う義務教育学校です。小さな学校ですが、25クラスあります。1クラス23~28人で、児童数の標準は24人となっています。多くの学校が2交代制を敷いている中、この学校は1日制を実施しています。1年生から4年生までの登校時間は7時半で、下校時間は4時です。5年生から8年生は午前中授業で、登校時間は8時で、下校時間は1時15分です。クロアチア語はもちろん、英語も8年間必修となっています。この学校では、大学入試に対応した大学と提携した「アカデミー論理学」というプログラムがあり、大学に入るための訓練がなされています。

② 選択科目について (校長先生)

4年生から選択科目として「情報処理」と「宗教」、「第2外国語(イタリア語・ドイツ語)」があります。「宗教」については、複数の宗教に対応しており、カトリックだけでなく、イ



学校の外観 改修中である。



先生方との懇談



クリスマスの装飾がきれいな廊下

スラム教の授業もあります。昔は正教もあったのですが、現在は教会が担っています。プロテスタントについても同様です。「第2外国語」については、アルバニア語とロシア語も採用しています。多くは家族がその言語で話しているからという理由で選択しています。週1回2時間の授業です。アルバニア語の教員は、アルバニア出身でアルバニアの大学を出ており、クロアチアで教員になるための勉強をし、教員免許を取得して教壇に立っています。外国語の教科書は、大使館を通してその国の教科書を取り寄せています。

また、課外授業として、中国語も受講することができます。中国政府が中国語を世界に広めようと実施しているプログラムで、政府間で決めた講座です。費用の負担は全くなく、中国人の先生が教えに来てくれるので、多くの生徒が受講しています。

リエカ市の他の学校では、「少数民族のための言語の授業」として、マケドニア語、スロベニア語、チェコ語などに対応している学校が多いです。こうした授業については、少数民族の団体と交渉をして決めるのが一般的です。



子どもたちの作品は素晴らしいものばかり

1クラス13人で少人数授業

③ インクルーシブ教育について（心理士）

クロアチアの各学校には、支援級はありません。特に、リエカ市は福祉に力を入れており、障害のある子が通常の学級で過ごしていくことに対して、協力体制が作られています。障害のある生徒が学校生活を送る手助けをするための補助役を生徒1人につき1人配置することができます。その補助役も厳正な審査をして選ばれた方に来ていただいています。本校には視覚障害の生徒がいますが、他の子と同様に授業を受けています。他にも、複数の障害がある生徒、肢体不自由の生徒、授業に集中できない生徒がいて、一人ひとりに補助役が配置されています。

こうした支援については、保護者の要望が大きいですが、障害の程度によって審査をしていますので、決して要望通りになる訳ではありません。審査では、クラスへの適応の度合いやクラスで授業を受けることが可能かといったことを見ます。重度の障害であっても、肢体だけの障害ならば理学療法士を配置しようとか、行動に問題のある生徒でしたら、ソーシャルワーカーを配置しようとか、その生徒の障害や課題に応じて、行政ができることは何かということを検討します。そして、どのような補助が必要かを受け入れ校と話し合った結果、その生徒に適した補助役を配置し、できるだけ多くの授業に参加できるように工夫しています。

④ 「放課後の午後の時間」について（心理士）

この学校には、「私だけの学校の午後の部屋」という教室が2部屋あります。この部屋に来ているのは、1年生から8年生までの全学年で現在20人ほどです。ここに来ている生徒は様々な問題を抱えている生徒が多いです。全校生徒500人の中には、貧困家庭、片親、保護者が病気で不在、親から暴力を受けている、昼食を持参しない、家に帰っても一人で過ごさなくてはならないといった家庭環境に問題のある生徒が10人以上はいます。また、成績に不安を抱えている生徒や人間関係に悩んでいる生徒も数多くいます。そのような生徒のために学校ができることはないのかということを考えてできたプログラムが、この学校独自のプログラム「放課後の午後の時間」であり、この「私だけの学校の午後の部屋」なのです。

この部屋は、おうちの居間のように感じられる空間になるように考えてつくりました。学校の中にも居心地がよく、学校と生徒との結びつきを大切にしたい空間があってもいいのではないかとこのプログラムは実施されています。ここでは、生徒に無理やり何かをさせるということはありません。勉強したい生徒はするし、本を読みたい子は本が読めます。自然にここにいることができる居場所をつくるのが目的なのです。幸い、いろいろな学年の生徒がいることによって、上の子が下の子の面倒を見るといった異学年交流が実現でき、より良い人間関係が築くことができています。この部屋のスタッフが行っていることといえば、衛生的な生活習慣を教えたり、子どもどうしのトラブルに仲介したりするくらいです。

また、このプログラムが実現できたことによって、昼食が提供できるようになりました。これまで、朝7時くらいに朝食をとってから夕方5時くらいまで食事をとらなかった生徒がいたのですが、この問題が解消されました。他にも、このプログラムに賛同してくれた団体から本やおもちゃの寄付が届き、本は200冊を超え、おもちゃもたくさん揃っています。地域のお祭りに参加したり、近所の映画館からは無料で鑑賞できる機会をいただいています。

このプログラムは、リエカ大学の協力により、教育学部の学生と一緒にプランを作成しました。そして、その道のりは大変でしたが、リエカ市に交渉して、最終的には出資してもらうことができたのです。また、国（日本の厚生労働省にあたる保健・社会福祉省）の「子どものための基金」からも39万クーナ（日本円で約633万円 1クロアチア クーナ



校長先生と心理士の先生



暖炉が模してある「午後の部屋」



整然と並べられている本棚

=16.2414 日本円 2017年1月10日時点)を出資してもらいました。毎年、予算の問題は付いて回りますが、このプログラムを継続していくにあたっては、リエカ市が大きな理解を示してくれたことが大きいと感じています。

このプログラムの実施にあたっては、教育学部の学生の支援が大きいです。それだけではなく、この学校の先生も訪ねてくれますし、ここに所属していないクラスの友達が来ることもあります。この空間は誰かを管理するための場ではありません。多くの人と交流する場なのです。ボランティアの方が参加することもあるれば、両親が参加することもあります。保護者会を開いて保護者どうしの関係を築くこともありますし、時には衛生状態が悪い家の保護者を指導することもあります。このようなプログラムは保護者からの評価も高く、感謝されることも多くあります。



リエカの街とアドリア海が一望できるトルサット城

4. 副市長訪問報告

今回、リエカ市長の都合が合わずお会いすることが叶わなかったことは残念でしたが、前回、川崎で開催された第7回国際教育交流シンポジウムに参加して下さったサンダ・スジャンリエカ市教育課長も病気のためお会いすることができなかったことはさらに残念でした。しかし、マルコ・フィリポヴィッチ副市長のあたたかい歓迎の言葉にとっても感銘を受けました。



市庁舎内を案内して下さったマルコ・フィリポヴィッチ副市長

副市長「ようこそリエカにお越しくださいました。1977年に姉妹都市として締結されてから来年で40年になります。これまで素晴らしい関係が築けてきたと思います。リエカ市はクロアチアで3番目の都市で人口は13万人です。川崎と同じ港湾都市で、

クロアチア最大の港です。コンテナもあり、客船も来る素晴らしい港です。また、リエカ大学という誇るべき大学のある大学都市ともいえます。今回、教育のプログラムに関する視察だとお聞きしました。リエカ市が推進している大切なプログラムを行っている学校 2 校と障害のある生徒の発達のための特別支援教育センターということで、素晴らしい実践が視察できることと思います。川崎とリエカは地理的には遠いかもしれませんが、今後とも交流が続けられる友好関係を大切にしていかななくてはなりません。この訪問が 40 周年記念の導入だと考えています。これからもよろしくお願いします。」

高木団長「お忙しい中、時間をつくっていただきありがとうございます。リエカ市には観光、港湾、工業の 3 つの特徴があると思います。川崎も同じような都市です。お互い文化交流をしてきましたが、これからもよろしくお願いします。本日、特別支援教育センターを見学させていただきましたが、障害の有無にかかわらず全ての子どもが幸せに生きていくという考えの教育には大変共感できました。ありがとうございました。将来にわたって平和で幸せな社会をつくっていくことが政治の使命だということも考えさせられました。共にこうした考えの教育が発展できますように願っています。来年は姉妹都市締結 40 周年ということですが、5 年に 1 度行われている国際教育シンポジウムも川崎で開催されます。ぜひ、川崎へお越しください。心よりお待ちしております。最後に、うらやましいと感じたことがあります。それは、1 クラスの生徒数の少なさです。日本では、35 人から 40 人の生徒を 1 人の先生が指導しています。リエカ市の 1 クラスの生徒数はちょうどいい人数だと思いました。誰もが子どもたちを大切にする教育を実現したいと思っています。今後とも交流を深めていきましょう。」

副市長「とても嬉しい言葉をありがとうございます。いい街、いい学校と行ってくださって感謝します。リエカ市は福祉に力を入れている街ですので、より嬉しく思います。ヨーロッパでは、学校において様々な問題が発生しているのですが、1 クラスの人数が少ないことについては、本当に恵まれていると感じています。もう一つ、観光産業のことを言われましたが、実は、リエカ市は年間 20 パーセントも観光客数が増えており、このことも誇りに思っています。川崎市とはこれからも協力関係を築けていけたらと考えています。この滞在を楽しんでください。」



5. 訪問を終えて

今回の訪問で確信したことは、私たちが日々担っている川崎の教育が向かっている方向は間違っていないということです。リエカ市が取り組んでいる「市民教育」は川崎の“共生・共育プログラム”に通じるところがありましたし、「午後の時間」についても「居場所づくり」ということで、“川崎市子ども夢パーク”が実践していることに繋がります。「多文化共生」の取組は“川崎市ふれあい館”が全国的に先駆けて取り組んできた実践例があります。リエカ市の目指している理念は、私たち川崎の教職員が目指すべき方向と一致しており、お互いの課題を共有することこそ意義あることだと認識しました。

今回担当していただいた市の職員の方々との懇談の中で印象的だった話があります。「外国人の流入により、職業が奪われることがあるかもしれないし、外国人に憎しみを抱く感情も分からなくはないです。1991年のクロアチア独立により民族問題が顕在化し、社会不安の原因として追及する者もいますが、リエカは多民族に慣れている環境があり、少数民族や外国人との共生に対応した教育プログラムを実施してきました。ですから、リエカでは、少数民族や外国人に対して憎しみを感じるという話は聞いたことがありません。」という言葉には大変驚かされました。これまでの歴史や社会背景とともに、多文化共生を掲げた教育実践があるからこそ「おもてなしの心」や「寛容な心」が形成されていくということを感じました。川崎でも同様の課題を抱えており、解決のために見習わなくてはならない手だてがリエカ市の実践の中にはたくさんありました。

最後に、リエカ市の教育の特徴を川崎の教育施策と関連させて報告します。

- (1) 少数民族教育・多文化教育・・・クロアチア独立から25年。まだ、戦争の傷跡を負って生活をしている人がいる。市内には少数民族が多く居住し、リエカ市の文化や社会に多様性を与えている。クロアチア語、英語だけではなく、ドイツ語、イタリア語、少数民族の言語などを小学生のときから習得できるようにカリキュラム編成がなされている。日本の「道徳」にあたる「宗教」の授業も、カトリックだけではなく多くの宗教に対応しており、リエカの街の「寛容さ」を象徴している。
- (2) 人権尊重教育・共生共育・・・「市民教育」と呼んでいるプログラムは、言葉が通じなくとも文化が違っていてもそれらを認め合い共に生きていこうという、リエカ市が目指している「非暴力」「寛容」「連帯」を大切にする社会の実現のためには欠かせないプログラムである。友達と協力しながら課題を解決していくゲームの展開は川崎市が実践している“共生・共育プログラム”そのものである。
- (3) 障害児教育・・・特別支援教育センターでは、手厚い指導の様子が伺えた。製本作業や縫製作業など、社会に出てから役に立つ職業訓練が実施されていた。また、各学校には支援級がないというので、実際に見学させていただくと、インクルーシブ教育が進んでいるため、支援が必要な生徒には「補助役」のスタッフが付いているということが分かった。大人の補助があれば他の生徒と一緒に学習ができるのなら

ばそれを実現するということなのだ。障害の有無にかかわらず、子どもたちどうしのコミュニケーションを大事にしており、全ての生徒の幸せが学校全体の幸せであり、ひいては、社会の幸福に繋がっている。「福祉」に力を入れているリエカ市の素晴らしさを実感できた。

- (4) 放課後の過ごし方・・・「午後の時間」と呼ばれるプログラムは、川崎で言うところの“わくわくプラザ”や“こども文化センター”に心理士の先生がいるといった感じだろうか。しかし、それ以上に学校におけるプログラムという利点を生かし、給食を提供したり、保護者に対し環境衛生の指導をしたりするという一方で、かなり家庭の事情に踏み込んだ支援体制が構築されているということを感じた。
- (5) キャリア教育・・・初等教育の8年間で14歳で終わると、その後の進路の選択をしなくてはならない。保護者が示唆したり、教員がアドバイスをしたりすることも当然あるが、子どもたちが自分の進むべき道を14歳で選択しなくてはならないのである。とりあえず高校に行って問題を先送りする者もいるそうだが、就職するか、手に職をつけるか、芸術の道に進むか、大学を目指すか、一度立ち止まって進路について考える機会がある。今、学習していることが将来に繋がっているということを実感させることを大切にしており、職業体験の機会も設けている。
- (6) 少人数学級・・・見学をさせていただいたクラスの手厚さには驚かされた。1クラスの生徒数の基準が24人であり、多くとも29人になったら2クラスになるそうである。授業によっては、さらに少人数指導を行うこともあり、40人の生徒を1人の教員が指導をしている日本とは大違いである。
- (7) インターン制度・・・クロアチアでは、教員に採用された後、1年間は見習い期間だそうで給料が出ないそうだ。2年目から、「情報処理」「生物」「宗教」といった専門的な研修を受け、3年目にしてようやく一人前の教員となるそうである。1年目が無給だということには驚かされたが、クロアチアでは、教員という職業は、それだけ専門職だということなのである。
- (8) 女性の管理職登用・・・教員の女性の割合が8～9割であることに對し、当然、管理職も8～9割が女性なのだそうだ。ここも日本とは違う。リエカ市には初等教育学校が28校あるが、男性の管理職は5人程度だそうである。今回、対応して下さった市の職員の方もみなさん女性であった。一般企業はまだまだ男性社会だけれども、教育現場の管理職は大多数が女性だそうだ。



- (9) 教職員のモチベーション・・・各学校で対応をして下さった教職員の方々には口を揃えて「自分たちの仕事に誇りを持っています」と話していた。教員を始め、心理士やソーシャルワーカー、作業療法士、理学療法士と、学校で指導にあたっている者は専門職であり、プロフェッショナルな仕事をしているという意識が高く、同時に社会からの評価も高い。だからこそ、仕事に誇りを持ち、向上心のある職員が多いという印象を受けたのだと思う。

GRAD RIJEKA Posjet prosvjetara iz Kawasakija

Japance zanima naš obrazovni sustav

RIJEKA ▶ Grad Rijeka ugostio je predstavnike sindikata učitelja iz japanskog grada Kawasakija koji će nekoliko dana boraviti u našem gradu i upoznati se s radom Centra za odgoj i obrazovanje te OŠ San Nicolo i Nikola Tesla. Cilj njihova boravka je detaljnije upoznati obrazovni sustav osnovnog i srednjeg školstva u Hrvatskoj. Predstavnici Grada Rijeke jučer



Prijem za izaslanstvo Grada Kawasakija

su ugostili izaslanstvo u sastavu Sayaka Takagi, ravnatelj OŠ Kawasaki Municipal Minami-Suge, Hiroyuki Kato zamjenik predsjednika IO Sindikata učitelja i nastavnika Kawasakija i Masashi Uruma, pomoćnik generalnog tajnika.

Centar za odgoj i obrazovanje gostima je predstavio rad s djecom osnovnoškolskog i srednjoškolskog uzrasta s različitim stupnjevima teškoća u razvoju, pri čemu je Takagi uočio veliku razliku, jer u Rijeci djeca s poteškoćama pohađaju Centar, dok u Kawasakiju svaka škola ima svoj program za njih. – No naši su ciljevi isti, da sva djeca budu sretna, bez obzira na to imaju li ili nemaju razvojne poteškoće, kazao je Takagi i dodao da nam zavidi jer u riječkim razredima učitelji rade s manje učenika nego u Japanu. Zamjenik riječkog gradonačelnika Marko Filipović odgovorio mu je da je i Rijeku pogodila depopulizacija te da se nada da ćemo i mi uskoro imati brojčano jače razrede. (B. S.)

リエカの地元紙「NOVI LIST」12月6日号に記事が掲載されました。

川崎の教員によるリエカ市訪問

日本の教育者らが我が国の教育システムに関心を示す

日本の川崎市の教職員の代表者らがリエカ市を訪れている。この訪問団は、数日リエカに滞在し、特別支援教育センター、サン・ニコロ小学校およびニコラ・テスラ小学校を視察。クロアチアの小・中学校の教育システムを詳細に知るのが目的だ。リエカ市の代表者たちが昨日迎えた訪問団のメンバーは、川崎市立南菅小学校校長の高木朗氏、川崎市教職員組合執行副委員長の加藤弘行氏、同組合書記次長の穂間雅史氏。

特別支援教育センターでは、障害の程度が異なる小・中学校の子どもたちの授業や活動を紹介したが、高木氏は、各学校に支援級を設ける川崎市と障害のある子どもたちがセンターで教育を受けるリエカ市との大きな違いを目の当たりにした。「しかしながら、我々の目指すものは同じ。障害の有無に関係なく、子どもたちが幸せになること」と言う高木氏は、クラスの生徒数の少ないリエカがうらやましいと付け加えた。これに対しリエカ市副市長マルコ・フィリポヴィッチは、人口減少に直面しているリエカでも、今後クラスの生徒数が増加するだろうと述べている。

川崎市姉妹友好都市国際教育交流事業実施要項

(目的)

第1条 川崎市姉妹友好都市国際教育交流事業（以下「国際教育交流事業」という。）は、川崎市及びその各姉妹・友好都市の教職員同士の交流を通して、教育情報の交換、教育の現状と課題等について協議し、姉妹・友好都市間の相互理解と友好の推進を図るため実施するものとする。

(国際教育交流事業の範囲)

第2条 国際教育交流事業は、次の各号に定めた事業とする。

- ・ 姉妹友好都市教育事情調査事業
- ・ 姉妹友好都市国際教育交流シンポジウム事業（以下「国際教育交流シンポジウム事業」という。）
- ・ 姉妹友好都市国際教育交流誌上シンポジウム事業
- ・ その他必要な事業

(主催)

第3条 国際教育交流事業は、川崎市姉妹友好都市国際教育交流事業実行委員会（以下「実行委員会」という。）が主催する。

(実行委員会の構成)

第4条 実行委員会の委員は、次に掲げる者で構成する。

- ・ 川崎市立小学校長会 会長
 - ・ 川崎市立中学校長会 会長
 - ・ 川崎市立高等学校長会 会長
 - ・ 川崎市教職員組合 執行委員長
 - ・ 川崎市教職員組合 執行副委員長
 - ・ 川崎教職員会館 理事
 - ・ 川崎市教育委員会 総務部長
 - ・ 川崎市教育委員会 学校教育部長
 - ・ 川崎市総合教育センター 所長
 - ・ 川崎市教育委員会 指導課長
- 2 前項の規定に係わらず、必要と認めるときは実行委員会に諮ってその構成を変更することができる。

(実行委員会の業務)

第5条 実行委員会は、第2条に定める国際教育交流事業の実施にあたって必要な次の業務を行う。

- ・ 教育事情調査内容の精査
- ・ 姉妹友好都市教育委員会との連絡・調整
- ・ 姉妹友好都市の教職員との教育情報の交流の推進
- ・ シンポジウム事業の推進
- ・ その他必要と認める業務

(実行委員会の役員等)

第6条 実行委員会に委員長及び副委員長を置く。

- 2 前項の委員長および副委員長は委員の互選とする。

(実行委員会の開催等)

第7条 実行委員会は、委員長が必要に応じて会議を招集する。

- 2 実行委員会は、委員長が主宰するほか、会議を総理する。

(事務局の設置)

第8条 実行委員会に事務局を置き、庶務的事項およびその他必要な事項の処理を行う。事務局は、川崎市教職員組合に置く。

- 2 事務局に事務局長及び事務局次長を置き、委員長が指名する。

(国際教育交流シンポジウム事業の開催)

第9条 国際教育交流シンポジウム事業は、概ね5年に1回姉妹友好都市の教育関係者等を招聘し、川崎市において開催するものとする。

- 2 前項の開催にあたっては、第6条に定める実行委員会の構成を必要に応じて変更するものとする。

(委任)

第10条 この要項に定めるもののほか必要な事項は、実行委員会に委任する。

附 則

(施行期日)

- 1 この要項は、2011年9月22日から施行する。

川崎市姉妹友好都市国際教育交流事業の経過報告

姉妹都市：リエカ市（クロアチア共和国）、ボルチモア市（アメリカ）、
瀋陽市（中国）、ウーロンゴン市（オーストラリア）

友好都市：シェフィールド市（イギリス）、ザルツブルク市（オーストリア）、
リュウベック市（ドイツ）、富川市（韓国）

友好港：ダナン港（ベトナム）

1981（昭和56）年	リエカ市、瀋陽市
1982（昭和57）年	第1回国際教育交流シンポジウム リエカ市、ボルチモア市、瀋陽市
1983（昭和58）年	リエカ市、ボルチモア市、瀋陽市
1984（昭和59）年	ボルチモア市
1985（昭和60）年	リエカ市
1986（昭和61）年	瀋陽市
1987（昭和62）年	第2回国際教育交流シンポジウム リエカ市、ボルチモア市、瀋陽市
1988（昭和63）年	リエカ市、ボルチモア市、瀋陽市 セーシェル
1989（平成元）年	ウーロンゴン市
1990（平成2）年	瀋陽市
1991（平成3）年	ボルチモア市
1992（平成4）年	第3回国際教育交流シンポジウム ボルチモア市、瀋陽市、ウーロンゴン市
1993（平成5）年	瀋陽市
1994（平成6）年	ウーロンゴン市
1995（平成7）年	瀋陽市
1996（平成8）年	ボルチモア市
1997（平成9）年	第4回国際教育交流シンポジウム ボルチモア市、瀋陽市、ウーロンゴン市、富川市
1998（平成10）年	瀋陽市
1999（平成11）年	瀋陽市
2000（平成12）年	富川市
2001（平成13）年	富川市
2002（平成14）年	第5回国際教育交流シンポジウム リエカ市、ボルチモア市、瀋陽市、ウーロンゴン市、富川市
2003（平成15）年	ボルチモア市
2005（平成17）年	ウーロンゴン市
2007（平成19）年	第6回国際教育交流シンポジウム リエカ市、ボルチモア市、瀋陽市、ウーロンゴン市、富川市
2008（平成20）年	瀋陽市
2009（平成21）年	新型インフルエンザの流行により中止
2010（平成22）年	シェフィールド市
2011（平成23）年	瀋陽市
2012（平成24）年	第7回国際教育交流シンポジウム リエカ市、ボルチモア市、瀋陽市、シェフィールド市
2013（平成25）年	シェフィールド市、瀋陽市
2014（平成26）年	富川市
2015（平成27）年	ウーロンゴン市
2016（平成28）年	リエカ市
2017（平成29）年	第8回国際教育交流シンポジウム

2016年（平成28年度）

川崎市姉妹友好都市国際教育交流事業実行委員会

実行委員（委員長 石橋 俊治 ・ 副委員長 門倉 慎児）

石橋 俊治	川崎市立小学校長会	会 長
堀米 達也	川崎市立中学校長会	会 長
宮津 健一	川崎市立高等学校長会	会 長
芹澤 成司	川崎市総合教育センター	所 長
小椋 信也	川崎市教育委員会	総務部長
小田嶋 満	川崎市教育委員会	学校教育部長
渡辺 英一	川崎市教育委員会	指導課長
門倉 慎児	川崎市教職員組合	執行委員長
加藤 弘行	川崎市教職員組合	執行副委員長
米田 信一	（一財）川崎教職員会館	館 長

事務局（事務局長 阿部 直樹）

阿部 直樹	（一財）川崎教職員会館	理事 （事務局長）
粂間 雅史	（一財）川崎教職員会館	理事 （事務局次長）
長妻 郁子	川崎市教職員組合	教文部長
中嶋 康晴	（一財）川崎教職員会館	監事
野本 宏一	川崎市教育委員会	庶務課長

川崎市姉妹友好都市国際教育交流事業

リエカ市訪問団名簿

団長	高木 朗	川崎市立南菅小学校 校長
副団長	加藤 弘行	川崎市教職員組合 執行副委員長
団員	粂間 雅史	(一財) 川崎教職員会館 理事
通訳	山本 郁子	



高木 朗 加藤 弘行 山本 郁子 粂間 雅史

リエカ市庁舎前にて